広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	中世高地ドイツ語における未来表現について
Author(s)	田村，泰男
Citation	ニダバ , 17 : 11 - 20
Issue Date	1988-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00047188
Right	
Relation	

論　文

中世高地ドイツ語における未来表現について

田　村　泰　男

はじめに

新高ドイツ語においては、時称として二つの単独時称ー現在、過去ーと四つの複合時称ー未来、現在完了、過去完了、未来完了ーが認められている。

しかしゲルマン祖語の時代においては、時称は過去と現在の二種類しかなく、発話時点より前のことを指示する場合は過去形で、発話時及びそれより後のことは現在形で表現された。つまり、未来時を指示するための一定の形式を持っていなかったのである。このため、新高ドイツ語においてwerdenの現在形に当該動詞の不定形（以下Inf.と略す）を添える形式が定着するまでに様々な表現方法がとられてきている。

本稿では、中高ドイツ語期における未来時を示す表現形式を調査・考察することを目的とし、あわせてゴート語・古高ドイツ語期の表現手段も概観してみることにする。

1

まず初めに、Behaghel (1924), Dal (1966)[1]の記述をもとにゴート語と古高ドイツ語における未来時を示す表現形式をみてみよう。

1.1　Ulfilasはギリシャ語の未来形をゴート語に翻訳するのに、多くの場合ゲルマン語本来の表現方法である直説法現在形によって表現しているが、希求法（Optativ)の現在形を用いることも稀ではなかった。

・in jainamma daga in namin meinamma bidjiþ (αἰτήσθε),
　jah ni qiþa izwis þei ik bidjau (ἐρωτήσω) attan bi izwis
　その日には、あなたがたは私の名によって求めるであろう。（Joh. 16, 26)
　私はあなたがたのために父に願ってあげようとは言うまい。

現在形を用いない場合は大抵duginnan[2]またはhabanにInf.を添える二項表現が用いられているが、用例は少なく、現在時称との対立関係が問題となるような場合だけである。

・þarei im (εἰμί) ik, þaruh sa andbahts meins wisan habaiþ (ἔσται)
　私のいるところに、私に仕えるものもまたいるだろう。　(Joh. 12, 26)

・jah in þamma fagino (χαίρω), akei jah faginon duginna (χαρήσω) (Phil. 1, 18)
私はそれを喜んでいるし、また喜ぶであろう。

上記以外では、skulan＋Inf. や wairþan＋現在分詞（以下Part. Präs. と略す）による表現もみられる。

・hwa skuli þata barn wairþan (τί ἄρα ἔσται) (Luk. 1, 66)
この子はどんなものになるだろう。

・saurgandans wairþiþ (λυπήσεσθε) (Joh. 16, 20)
あなたがたは憂えるだろう。

1．2　古高ドイツ語においてもまた、未来は動詞の現在形で表現されている。

・inti manage in sinero giburti mendent (gaudebunt). (Tatian 2, 6)
そして多くのものが、彼の誕生を喜ぶであろう。

・"alliu tua mit kiratida indi after tatim nihriuoes
(non paeniteberis)" (Bened. 203, 29)
あらゆることを助言とともに行え、行為の後で後悔しないように。

またsculan＋Inf. による書き替えも広まってきており、wellen＋Inf. の形式も未来の意味で現れている。

・min gheist scal wesan (erit) undar eu mittem (Isidor IV, 6)
私の霊魂はあなたたちの中にいるだろう。

・er scal sinen druton thrato gemunton ;
then alten satanasen wilit er gifahan. (Otfrid I. 5, 51－52)
彼は、彼の愛するものたちをしっかりと守るだろう。
彼はその年とった悪魔を捕まえるだろう。

werden＋Part. Präs. は、それ自体古高ドイツ語にはあまり現れておらず、未来の意味を持つことは稀である。

・Thie min furlougnit(negaverit) fora mannun inti min scamenti wirdit
(confusus me fuerit) in thesemo furleganen cunne inti suntigemo, furlougnu
(negabo) in sin … (Tatian 44, 21)
しかし、人々の面前で私を拒み、邪悪で罪深いこの時代において私を恥じるものを私も拒むであろう。

werden＋Inf. についてはEbert (1978)[3] に次のようにある。

In ahd. Zeit findet sich kein einwandfreier Belege der Konstruktion werden＋Inf.,

2

2.0　中高ドイツ語[4]においてもまだ未来時を表現するための一定の形式は存在しておらず、次のような手段によってそれは表現されている。

2.1 現在形の使用

(2.1.1直説法の場合　2.1.2接続法の場合)

2.2 話法の助動詞 (Modalverb) を用いた表現から

2.3 起動相 (inchoative Aktionsart) を表す形式の使用

2.1　現在形の使用

2.1.1　直説法現在の場合

多くの場合、文脈によって未来を表現していると理解されるが、他の手段が付け加わることによって意味が一層明確にされる。

(1) 未来時を示す副詞(句)との共起によって

・wan nû verlius ich morgen
alle mîn êre.　(Iw.4738－4739)
明日私は、私の名誉をすべて失うのです。

・Dô sprach der künec Gunther: 《über dise siben naht
sô künd' ich iu diu mære, wes ich mich hân bedâht
mit den mînen friunden. …… (Nib.1450,1－3)
そこでグンテル王は言った。「今から七晩の後に、一族のものと考えて取り決めたことをあなたがたにお知らせしよう。

(2) 条件文の付加によって

・swenne iuwer sun gewahset, der trœstet iu den muot. (Nib.1087,3)
汝の息子が成長すれば、汝の心を慰めてくれるであろう。

・deiswâr, sô hâstû guot heil,
gescheidestû mit êre dan.'　(Iw.596-597)
実際、お前が名誉をもってそこから帰ってこられたら、お前は運のよい奴だ。」

(3) 命令文の先行によって

・……, so besendet iuwer man,
die besten, die ir vindet　oder inder müget hân.
sô wel ich ûz in allen　tûsent ritter guot,　(Nib.1472,1-3)

見出せる限りの、あるいはお持ちになる限りの最善の郎党を召集なさいませ。
（そうすれば）私がすべての中から精鋭の騎士千名を選びましょう。

(4) 未来時を示すwellen＋Inf.やsuln＋Inf.を含む文の先行によって[5]

・des wil ich dir lônen, so ich aller beste kan.

Ûzer mîner kameren sô heiz' ich dir geben, (Nib. 1151, 3－1152, 1)
それに対してはできるだけの報酬を汝に支払おう。……
私の宝庫から汝に与えるよう（家臣に）命じよう。

・ich sol hie wâpen alsô tragn
daz wirt gestochen unt geslagn.
ez sî strîten oder turnei,
hie belîbet vil der sper enzwei.' (Parz. 347, 11－14)
私はここで武器をとり、突き合い斬り合いを行おう。戦闘であれ馬上試合であれここには多くの槍が砕け散ることになろう。

接頭辞ge-のついた現在形も未来表現の一端を担っていたようである[6]。

・so gesihe ich, swenne ich scheide dan,
den vil ungetânen man (Iw. 933－934)
そしてそこを立ち去ってから、私は大そう醜い男に会うだろう。

・sweder nû tot gelît
von des anderen hant, (Iw. 6960－6961)
二人のうち一方が、もう一人によってうち殺されたら、

・swenne iuwer sun gewahset, der trœstet iu den muot. (Nib. 1087, 3)

・ich weiz vil wol, waz Kriemhilt mit disem schatze getuot. (Nib. 1272, 4)
クリエムヒルトがあの宝で何をするか私はよく知っている。

接頭辞 ge-を伴う動詞の現在形についてもまた、副詞や副詞的規定語によって、その未来の意味は一層明確となる。

Behaghel (1924)[7]はまた「話の予告」「要請の承諾」の表現も未来表現としての現在形の使用に含めている。

・dar under lêr ich iuch wol
iuwer êre bewarn. (Iw. 2800－2801)
それにつけても私は君に君の名誉を守る方法をくわしく教えたいと思う。

・ich sag iu wie ez umb sî stât. (Iw. 6020)

彼女にどんな事情があるかあなたにお話ししましょう。

・nu helfet dirre meide mir.'

'daz tuon ich' sprach der Wâleis, (Parz. 327, 14－15)

さあこの乙女が得られるようお力添えください。」「そうしてつかわそう」

ヴァーレイスの勇士は言った。

2.1.2 接続法現在の場合

接続法現在形もまた未来の意味をもって副文に現れている。

・Ir müezet alle rîten, unz er werde tac.〉 (Nib. 1622, 1)

汝らは皆、夜が明けるまで馬を進めなければならない。

・Sît hie unz ich mîn reht genem: (Parz. 88, 29)

私が判決を受けるまでここにいて下さい。

・verholne von mir kêre,

unz sich erhebe hôch der tac, (Parz. 646, 26－27)

密かに私のもとを出て、日が高くのぼるまで隠れていなさい。

接続法現在形については判断が難しく、詳細については今後の課題としたい。

2.2 話法の助動詞（Modalverb）を用いた表現

suln, wellen, müezen にInf.を添えて表されるModalität(様態)に共通することは、それらが動詞的事象（Verbalvorgang)を話者の意志に関係づけており、同時に時間の流れの中で現在の向こう側にのびているものの特徴をそれに与えているということである。これらの形式において様態の意味要素がまだどのぐらい強いか、時称的意味がどれほど強いかということは、それぞれ個々の場合において考察する必要があり、同じテキスト内で様態の意味が有力となったり、時称的意味が有力となったりしている。

純粋に時称的意味で使用されている用例は少ない。

2.2.1 suln＋Inf.

中高ドイツ語期においてよく用いられた形式である。しかしながら、未来時を示すためだけに使用されていると認めることのできる用例は少ない。

・ouch sol ich schiere tôt geligen. (Iw. 4223)

しかし私はまもなく死ぬのです。

・mir sol des strîtes vür komen

mîn her Gâwein (Iw. 914－915)

戦いに関しては、ガーヴェイン卿が私より先んずることになろう。

・und dâ nâch sol ich schouwen

die schœnen juncvrouwen, (Iw. 929－930)

その後、私はその美しい娘に会う。

・ich sol iuch wol behüeten vor ir mit den listen mîn.〉

私が秘策をもって彼女(=女王)からあなたをお護りします。」 (Nib. 426, 4)

・want si sihet iuch gerne durch die swester mîn,

vroun Kriemhilden ; ir sult ir willekomen sîn.〉 (Nib. 1452, 3－4)

なぜなら彼女(=母)は、私の姉クリエムヒルトのために喜んであなたたちにお会いになるからだ。(それゆえ) あなたたちは歓迎されるであろう。」

様態の意味が強いか、時称的意味が強いか判断が難しい用例もある。

・swaz der küneginne liebes geschiht,

des sol ich ir wol gunnen : si ist diu swester mîn. (Nib. 1204, 2－3)

妃にとって幸いになることなら何であれ、私はそれを彼女に許すべきだろう。

彼女は私の妹なのだから。

・doch sulent ir in allen

deste wirs gevallen

die triuwe und êre minnent (Iw. 3175－3177)

しかし (それだけに) 信義と名誉を重んじる人々皆にとって、あなたは一層きらわれるべきであろう。

2.2.2 müezen＋Inf.

この形式は純粋に時称的な意味に近づくことは稀であり、様態の意味を強く保っている。

・ir sult vil rîchiu kleider dâ ze hove tragen,

want uns dâ sehen müezen vil minneclîchiu wîp. (Nib. 506, 2－3)

汝らはできるだけ立派な服装をして宮廷に行かなければならない。

なぜならたいそう美しい婦人たちに会うことになるからである。

・Si gedâhte in ir sinne : 《und sol ich mînen lîp

geben einem heiden (ich bin ein kristen wîp) ,

des muoz ich zer werlde immer schande hân. (Nib. 1248, 1－3)

彼女は心に思った。「もしこの身を異教徒に任せたりしたら(キリスト教徒であるのに)、私は一生涯世間からそしられるだろう。

2.2.3 wellen＋Inf.

この形式は主としてvoluntativの意味をもっている。しかし同時に強く未来の意味を示すことができる。

・ouch enwil ich niht engelten
swaz ir mich muget schelten. (Iw. 213－214)
またあなたがどんなに私を非難しようとも、私は苦しむことはないでしょう。
・《sô wil ich selbe rîten》, sprach Sîvrit der degen,
《und wil der warte gegen den vîenden pflegen, (Nib. 179, 1－2)
「では私は自身で馬を進めて」とジーフリトは言った。「敵の偵察に出かけるとしよう。

時称的意味が強いと解釈される用例としては次のものがある。
・ir welt iuch alle vliesen, sult ir dir recken bestân.》(Nib. 1031, 4)
その武士たちを攻撃すれば、あなた方は皆命を失うことになりましょう。」

2.3 起動相（inchoative Aktionsart）を表す形式の使用

2.3.1 werden＋Part. Präs.

Part. Präs. と共に用いられたwerdenは、ある行為またはある状態に入ることを表し、「～になる」という意味をもっていた。そしてこの起動の意味が時称的な意味に転じ、werdenの現在形にPart. Präs. を添える形式は未来の出来事を表現するようになった。
・sol si nemen Etzel, gelebt si an die stunt,
si getuot uns noch vil leide, swie siz getraget an.
jâ wirt ir dienende vil manic wætlîcher man.》 (Nib. 1210, 2－4)
もし彼女(＝クリエムヒルト)がエッツェルに嫁がれ、その時まで生き残っておられたら、
彼女は私たちにできる限りの苦難をお与えになるでしょう。
なにしろ彼女には、多くの勇士が仕えることになりますから。」
・swie mich der künec nu varnde siht,
er wirt mich gerne sehende, (Trist. 3984－3985)
今のこのみすぼらしい私の姿を御覧になったとしても、
王様は喜んで私にお会いになるでしょう。
・und werdent mir dan alle
mit gemeinem schalle
gebende die schulde, (Trist. 14129－14131)
そして皆は口をそろえて私に罪をかぶせるでしょう。

2.3.2 werden＋Inf.

werdenの現在形にInf. を添える形式は、今回の調査からは用例を得ることができなかった。それ故にここでは、この形式に関する記述を整理してみることにする。
中高ドイツ語期におけるこの形式の使用状況については、Behaghel(1924)[8]に次のよう

にある。

Zwei Beispiele aus dem 11. Jahrh. ……Ebenso spärlich im 12. Jahrh. ……

Häufiger im 13., 14. und 15. Jahrh., namentlich in Prosa.

またPaul／Moser／Schröbler／Grosse (1982)[9]では、この形式が確固たる地歩を占めるのは14世紀の後半からであると述べられている。そして後に、新高ドイツ語期の初めから、未来時を示す表現形式として定着していき、werden＋Part. Präs. の方は消えていくのであるが、これについては次のような議論が出されている。

古高ドイツ語期においてはInf. を添える形式自体非常に稀であり、中高ドイツ語期においてもPart. Präs. を添える形式に比べて使用例が少ないことから、このInf. は形態論的にPart. Präs. に由来するのではないかということである。これには、〔1〕. 未来の意味を担ったwellen, suln＋Inf. からの類推による〔2〕. Part. Präs. の語尾が－ende＞－enne＞－eneと音韻変化をおこした〔3〕. 〔1〕〔2〕両方によって、という三つの意見が出されている。[10]

資料の不足からこれ以上の言及は差し控えたいが、いずれにせよこの形式については疑問が残るようである。

おわりに

以上中高ドイツ語期において未来表現に関わっていると思われる項目を分類し整理してきたわけであるが、結局のところ、未来時というものを中世の言語使用者がどのように意識しこの時期の言語に反映させたかということを理解するまでには至らなかった。

しかしながら、この時期ゲルマン語本来の未来表現である直説法現在形を多用しながらも、何らかの形で未来時をよりはっきりと表現しようと試みていたことは、新しい形式の導入・使用から知ることができる。

未来において起こる事件は、不確定で曖昧なものであり、話者の心的態度にその事件の起こる可能性が投影されると考えれば、Modalitätを表す表現が未来時を示すために用いられるのもわかるような気がする。

また、ある行為が始まることを表す表現やある行為が開始と同時に完了することを表す表現は、その行為が起こることに具体性を与え、未来においてその行為が起こることをよりはっきりと表現するのではないだろうか。

目下のところ、確固としたことは言えないが、今後とも幅広く用例を集め、この問題に取り組んでいくつもりである。

注

（1） Behaghel, O. (1924) Bd. II S. 251－263 ; Dal, I. (1966) S. 131－134

（2） "beginnen" の意味

(3) Ebert, R. P. (1978) S. 60

(4) 資料としては、「Iwein」「Der Nibelunge Nôt」を中心に用い、「Parzival」「Tristan」からも用例を集めた。また、用例の分類にあたっては、各資料の現代語訳も参考にした。

(5) Behaghel, O. (1924) Bd. II S. 254

Behaghelはさらにmögen(mhd. mügen)＋Inf. を含む文が先行する場合もここに加えている。

z. B. si sprach 'er mac si's wol erholn:

ich gib im noch gein allen trôst, (Parz. 358, 8－9)

彼女は言った。「彼はきっとそれを取り戻すでしょう。私は彼の勇気に対して信頼を与えるだろう。

(6) Dal, I. (1966) S. 133－134を要約すると：

「現代語においてperfektive Aktionsartをもつ動詞の現在形は規則的に未来の意味をもち (z. B. Ich treffe dich an der Kirche) 、古くはPerfektivierung、すなわち現在形に接頭辞ge-を付けることによって未来が表現された。中高ドイツ語においてもこの方法で未来を表現することができる」となる。

(7) Behaghel, O. (1924) Bd. II S. 253

(8) 同上 S. 261

(9) Paul／Moser／Schröbler／Grosse (1982) S. 371

(10) Ebert, R. P. (1978) S. 60－61によれば、〔1〕Behaghel, O., Saltveit, L. 〔2〕Naumann, H., Wilmanns, W. 〔3〕Dal, I. らの名前が挙げられている。

使用テキスト

Hartmann von Aue : Iwein, hrsg. von G. F. Benecke und K. Lachmann, neu bearbeitet von Ludwig Wolff, Siebente Ausgabe, Berlin 1968.

Das Nibelungenlied, Nach der Ausgabe von Karl Bartsch, hrsg. von Helmut de Boor, 21. Auflage, Wiesbaden 1979.

Gottfried von Straßburg : Tristan, Nach der Ausgabe von Reinhold Bechstein, hrsg. von Peter Ganz, 2Bde. Wiesbaden 1978.

Wolfram von Eschenbach : Parzival, Sechste Ausgabe von Karl Lachmann, Unveränderter Nachdruck, Berlin 1965.

次の文献は対訳であるが、テキストの解釈に参照した。

Hartmann von Aue : Iwein, Urtext und Übersetzung, Übersetzung und Anmerkungen von Thomas Cramer, Berlin 1981.

Das Nibelungenlied, Mittelhochdeutscher Text und Übertragung, hrsg.,

übersetzt und mit einem Anhang versehen von Helmut Brackert, 2Bde.

Gottfried von Straßburg : Tristan, Mittelhochdeutsch/Neuhochdeutsch, Übersetzung und Nachwort von Rüdiger Krohn, 3Bde. Stuttgart 1981.

Wolfram von Eschenbach : Parzival, Mittelhochdeutsch/Neuhochdeutsch, Übersetzung und Nachwort von Wolfgang Spiewok, 2Bde. Stuttgart 1983.

参考文献

Behaghel, O. :Deutsche Syntax II, Heidelberg 1924.

Braune/Ebbinghaus : Gotische Grammatik, 19. Auflage, Tübingen 1981.

Braune/Eggers : Althochdeutsche Grammatik, 13. Auflage, Tübingen 1975.

Comrie, B. : Tense, Cambridge Univ. Press, 1985.

Dal, I. : Kurze Deutsche Syntax, 3. Auflage, Tübingen 1966.

Ebert, R. P. : Historische Syntax des Deutschen, 1. Auflage, Stuttgart 1978.

Grimm, J. : Deutsche Grammatik IV, Gütersloh [Neudruck : Heidesheim 1967.]

Lockwood, W. B. : Historical German Syntax, Oxford Univ. Press, 1968.

Paul, H. : Deutsche Grammatik IV, Tübingen 1920.

Paul/Moser/Schröbler/Grosse : Mittelhochdeutsche Grammatik, 22. Auflage, Tübingen 1981.

相良　守峯：ドイツ文法、岩波書店 1981.

山田　小枝：アスペクト論、三修社 1984.